

ホステリングマガジン vol.42 / 2025 Autumn

JAPAN  
Youth Hostels, Inc.

# H<sup>OSTELLING</sup> Magazine



COVER INTERVIEW

**田中麗奈**

迷うのも「旅」だから

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





さあ、おいしさと  
でかけよう!



ランチパック

たった80年前、  
海は戦場でした。



# 雪風 YUKIKAZE

竹野内豊 玉木宏 奥平大兼 当真あみ  
藤本隆宏 三浦誠己 山内圭哉 川口貴弘 中林大樹 田中美央  
田中麗奈 益岡徹 石丸幹二 中井貴一

主題歌:「手紙」Uru(ソニー・ミュージックアソシエイテッドレコーズ)

脚本:長谷川康夫 撮影監督:柴主高秀 VFX監督:オダッセイ 音楽:岩代太郎 監督:山田敏久  
協力:防衛省 海上自衛隊 撮影協力:平塚市 茅ヶ崎市 「小説版 雪風 YUKIKAZE」(小学館文庫) 製作:YUKIKAZE PARTNERS 製作プロダクション:デスティニー  
配給:ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント/バンダイナムコフィルムワークス  
©2025 Yukikaze Partners.



史実に基づく感動巨編

大ヒット  
上映中

日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟 (Hostelling International) や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

子どもはおとなに。  
おとなは子どもに、  
なれる場所。



- 02 Cover Interview  
田中麗奈  
迷うのも「旅」だから
  
- 08 Youth Hostel Pick up  
北軽井沢ブルーベリーユースゲストハウス  
子育てママ・パパたちが集い、語らう  
新時代のユースゲストハウス
  
- 12 Hostelling Magazine × 地球の歩き方  
美しきイスラムの国  
モロッコ
  
- 16 鉄道写真家 櫻井 寛「列車で行こう!」
  
- 18 松島むうの晴れときどき旅びより
  
- 20 YH-GUIDE ユースホステルガイド  
福島県 / 栃木県 / 群馬県 / 千葉県 / 東京都  
神奈川県 / 山梨県 / 新潟県 / 富山県 / 石川県 / 長野県

※本誌の情報は2025年9月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会 編集・発行人 寺島 真

TEL.(03)5738-0546 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

迷うのも「旅」だから

Hostelling Magazine Cover Interview

# Rena Tanaka

PROFILE |

俳優

田中 麗奈 (たなか れな)

1980年5月22日生まれ。福岡県久留米市出身。

1998年に映画「がんばっていきまっしょい」で初主演を務め、日本アカデミー賞新人俳優賞など多数受賞し、その後、映画「はつ恋」、「幼な子われらに生まれ」でも多数の女優賞を受賞。近年は、日本アカデミー賞優秀作品賞に選出された映画「福田村事件」、放送文化基金賞ドラマ部門最優秀賞を受賞したNHK「神の子はつぶやく」、NHK連続テレビ小説「プギウギ」などに出演。今後、映画「ストロベリームーン」(10/17公開)、映画「ナイトフラワー」(11/28公開)他多数の公開作品が控えている。

ヘア&メイク:岡野瑞恵 (STORM) / スタイリスト:市井まゆ /  
フォト:小林潤次 (七彩工房) / インタビューア:横山由希路 /  
ライター:ノヴァック悠 (fiotlo LLC)

## 一人旅から、親子旅へ 迷うのも「旅」だから

—田中さんは相当の旅好き、しかも“一人旅”がお好きとお聞きしましたが本当ですか？

旅は好きですね！今は子どもが小さいので、一人旅に行くわけにはいかないんですけど(笑)、20代の頃は1人でフラッと旅をしていましたよ。

—これまでに行った旅の中で、特に印象に残っている旅の思い出を教えてください！

印象に残っているのは、アメリカのセドナへの一人旅かな。「景色が素晴らしかった！」とは聞いていたのですが、モニュメントバレーは想像以上に雄大で驚きましたし、まだ“スピリチュアル”や“パワースポット”という言葉が今ほど一般的ではなかった頃だったと思うんですけど、ネイティブ・アメリカンの方のお宅にホームステイをしながら、現地に伝わる儀式を体験するツアーに参加したりして、楽しかったですね！

あとはスペインも良かったです！その時は現地に在住されている方と一緒に観光したんですけど、“美食の街”として有名なサン・セバスティアンで食べ歩きをしたり、バルセロナでは美術館巡りをしたり。本物のサグラダ・ファミリアを目の前にしたときはうれしかったですね。スペインはまた行きたいなあ。たまに思い出しては「いつか娘にも見せてあげたい」と思わせる旅でした。

—ちなみに、田中さんが一人旅を始めるきっかけは何だったのでしょうか？

「これっ！」というきっかけは覚えていないんですけど…。例えば、友達とお話をしていて「ここに行きたいね！」「行こう行こう！」と、一緒に旅に行く話が盛り上がっても、いざ計画を立てる段階になると、日程が合わなくて調整が難しいことってあるじゃないですか。でも、一緒に行く人と都合が合わないから、その旅を諦めたり、計画を変えるというのも、自分の中では少し違うなあと思っていて。自分の行きたいところに行って、食べたいものを食べて、旅先でやりたいことを全部実現するなら「1人のほうが早いかも！」と。そんな合理的な理由がきっかけで、一人旅をするようになったと思います。

—誰かと一緒に行く旅も楽しいですけど、一人旅には一人旅ならではの気楽さがありますよね！先ほど「最近是一人旅に行っていない」とおっしゃっていましたが、最近はお家族で旅を楽しまれているんですか？

そうですね。この前、娘の幼稚園の夏休みを利用して、バリ島のウブドに2人で行ってきました。私は九州の田舎で生まれて、自然の中でのびのびと育ったんですが、娘は東京生まれ東京育ち。「自然の中でのんびりとした暮らし」を体験させたくて、思い切って、当時3歳だった娘と一緒に出かけました。現地では、広大な田園の中にコテージが並ぶ、一つの村のような宿泊施設に泊まりました。とてもユニークな場所で、敷地内の建物はすべて廃材を再利用して作られていて、太陽光発電や雨水の再利用など、環境に配慮したつくりになっていました。滞在中は、敷地内で育てたお野菜を使ったお料理のワークショップに親子で参加したりして、自然とふれあいながら、ゆったりとした時間を過ごすことができました。本当に楽しい旅でしたね。

—環境に配慮した宿泊施設は世界のトレンドになっていますよね！ユースホステルでもヨーロッパを中心に組みが進んでいて、パリのユースホステル「HI Paris - Yves Robert」では雨水を循環して再利用したり、太陽光で館内の電源を賅ったりもしています。お子さんにとっても、とてもいい経験だったと思うんですけど、小さい子どもを連れての海外二人旅、大変なことはなかったですか？

それはもう……とっても大変でした(笑)。特に移動が大変で、空港のように人が多い場所も通るので、目を離して迷子にならないよう、常に気を張っていたと思います。東京からバリまでは飛行機で7時間ちょっとかかるんですけど、機内で子どもが退屈しないように、塗り絵やお菓子を用意したり、タブレットに子どもが遊べるアプリを入れておいたりして「子どもが飽きたら次が出てくる」みたいな(笑)、準備を万端に整えて向かいました。

ウブドに到着してからは、知人に紹介してもらった現地在住の方にもサポートしていただいて、子どもだけでなく私自身も旅を楽しんできました。

—旅の思い出を伺っていると、現地で暮らしている方との距離感が近いというか「現地の方と一緒に旅を作る」ような旅のスタイルですよね？

現地の方と一緒に旅をすることには、あまり躊躇しないかもしれないですね。好奇心のほうが勝るといえるのかな。せっかくの旅行ですから、いろいろ現地のことを知りたいですし、知らないことがあったら、どんどん聞きたくなっちゃうんです。

—ちょっと脱線してしまうんですが、リサーチをしている中で「かなりの方向音痴」との情報がありまして…。どの程度の方向音痴なのでしょう？

# Rena Tanaka

私、方向音痴？…ですね(笑)。もう、テレビ局とかに行ったときなんかは、トイレに入って出ると、右から来たか、左から来たか分からなくなって…。「あれ？楽屋はどこ？？」みたいな(笑)。それぐらいです。

—それはなかなか…(笑)。ちなみに旅行中は大丈夫なのでしょう？ちょっと心配で…。

どうなんだろう？旅先で迷った経験ってあったかな…？そもそも右も左も分からない場所に来ているので、自分が迷っていたとしても「迷った」にカウントしていないのかもしれない(笑)。迷うのもまた旅の醍醐味だと思って(笑)。

—「迷うのも旅」…なんだから素敵な言葉ですね！1人で旅することに不安はなかったですか？

私は、それがなかったんですよ。中学生のときにお仕事を始めて、福岡から1人で新幹線に乗ってロケ地に行ったり、スケジュールによっては泊まりになったりということもあったので、その経験に鍛えられたのかもしれないですね。あとは、台湾と北京に留学した経験や、海外の作品に出演するときに現地で生活する機会もありましたから、そういった経験も1人で海外に行くハードルを下げたかと思うます。

## まだ 80年、もう 80年。 映画の力を信じて挑んだ「奇跡の艦の物語」

—デビュー当時から、常に第一線で活躍されている印象があるのですが、これまでのキャリアの中で、ご自身の中でスランプというか、浮き沈みのようなものはあったのでしょうか？

役者としての人生も、気づけばもう30年なので、その間にはやはり浮き沈みはありました。でも、そういうときは「自分なりにバランスを取っているのかもしれない」と考えるようにしています。いつも楽しくて、すべてが順調というわけではなく「大丈夫かな」「不安だな」と感じる瞬間もあるし、メンタルが不安定になることもあれば、安定してくる時期もある。そうした波を一步引いたところから自然な流れとして受け入れることで、自分のキャリアを自然体で楽しめるようになりました。

—以前、他のインタビューで「演じることは社会とつながるツールだ」とおっしゃっていたのが印象的だったのですが、出演する作品を選ぶときの基準や大切にしているものはありますか？

出演作を選ぶときは「これは面白そう！」「やってみたい！」と、自分の心が動いたかどうかを大切にしています。最近「社会派の作品を選んで出演しているんですか？」と聞かれることもあ



ジャケット ¥69,300  
 パンツ ¥59,400  
 共にfavi mercato  
 (kuni@allvinc.com)  
 ピアス  
 Lamie (03-6303-4206)

るんですけど、私としてはテーマにこだわっているわけではなく、あくまで直感的に惹かれるものに挑戦している感じです。

ただ、結果として、自分が挑戦してみたいと感じた作品が「誰かの心に届いた」とか「誰かが喜んでくれた」と感じられる瞬間は、やっぱりうれしいですし、生きがいになっている気がします。「映画やドラマ、舞台という表現を通じて、人と人の心を結ぶこと」が、私にとっての“演じる”という仕事の意味なのかもしれません。

—現在公開中の映画『雪風 YUKIKAZE』では、竹野内豊さん演じる雪風の艦長・寺澤一利の妻、志津役でご出演されています。この作品のオフアールを受けたとき、どのような印象を持たれましたか？

オフアールをいただいたときから「これは、次の世代へのメッセージが込められた作品だ」と感じていて、どこか背筋が伸びるような、そんな緊張感がありました。正直に言うと、それまで私は「雪風」という駆逐艦の存在をまったく知らなくて。脚本を読んだときも現実のことがベースになっているのに、どこか信じがたいような、一言では言い表せない思いが胸に残ったのを覚えています。それでもやはり「この作品は、多くの方に届けたい。届けるべき作品だ」と感じたことは、今でも印象に残っています。

—映画を拝見すると、いわゆる戦争映画の中で「兵隊」と一括りにされてしまうような登場人物の一人一人が「その時代を懸命に生きた1人の人間」で「戦っていたのは彼らの帰りを待つ家族も同じだったんだ」と再認識させられました。

そうなんですよね。私が演じた志津も、あの時代に1人で子どもを守っていかなければならないというのは、並大抵のことではなかったと思います。志津は、夫の帰りをじっと黙って待っている、そんな女性なんです。きっと本当は、危険な場所から帰ってきた夫に「私だって怖かった」「あなたがいなくなったら、この先どうすればいいの？」という不安をぶつけたかったと思うんです。でも、それをこらえて「家に帰ってきたら、ほっとしてほしい。安心させてあげたい」という気持ちを優先する。そんなふうに、自分の気持ちを抑えてでも相手のために尽くす志津の姿には、演じながらも「この女性の強さは計り知れないな」と深く感じました。

—大和や武蔵といった有名な戦艦ではなく「駆逐艦 雪風」という、稀有な存在にスポットが当たったことに、戦争を体験した世代の方から「取り上げてくれてありがとう！」という声が多く寄せられているそうですね。

すごくうれしいです。勝ち負けや、味方と敵がどうなったか、ということではなく「命を守って、命を捨てずに帰ろう」とそんな思いを持った人たちが、あの時代にも確かにいた。その事実

を「雪風」という一隻の船が今に伝えてくれているようで。きっと、今までの戦争映画の視点とは違う視点から、戦争を考える映画になっているんじゃないかと思います。

今年が終戦から80年という節目の年ですよね。「終戦から80年」と聞くと、私は「たった80年しか経っていないんだ」と感じるんです。というのも、今年100歳で亡くなった祖母から、私は戦争当時の話を直接聞いた世代なので。でも、自分の娘の世代になると、家族から戦争の実体験を聞く機会はほとんどなくなってしまふ。そう考えると、戦争や平和について考えるきっかけとして、映画の果たす役割はとても大きいと思うんです。ぜひ、ご家族で映画館に足を運んでいただいて「80年前、日本ではこういうことがあったんだよ」とか「あなたのおじいちゃんはね…」と、次の世代に平和の尊さを伝えるきっかけにさせていただけたらと思います。

### アジアの俳優から受けた刺激が 日本文化への理解を深めるきっかけに

—田中さんは日本舞踊や茶道に造詣が深いと伺いました。日本の伝統文化に興味を持つきっかけは何だったのでしょうか？

20代前半の頃、台湾や中国などアジア圏の合作映画に出演して、アジアを舞台に活躍する俳優たちと一緒に作品を作る機会に恵まれたんです。でも、いざ彼らと対峙すると、自分だけ何かが足りないような、日本人の俳優としての軸がないというか、私は日本から来た俳優だけ「胸を張って『日本の俳優です』と言えるのかな？」という感覚になってしまって…。堂々と演じる共演者たちと交流する中で分かったのは、彼らは「自分の国の伝統的な芸能文化を学んでから、演劇の道に進んだ」という共通点だったんです。その経験がきっかけになって、日本に帰ってか

ら日本舞踊や茶道といった日本の伝統文化を学び始めました。

—海外の方に刺激を受けて、自分の国の伝統に興味を持つって、なんだか面白いですね！日本の伝統文化を学んだことで、俳優としてのお仕事に活かされた部分はありますか？

例えば日舞では「着物を着た状態でどう動けば美しく見えるのか」だったり「所作に込められた意味や作法」を学ぶことができずし、茶道もまた「道具の扱い」や「おもてなしの心」といった、日本人ならではの所作が詰まっているんです。そういった芸事を学ぶことで、役を演じる上での助けになっていると思います。それに、あの時感じた不安とは真逆の「ちゃんと学んできた」と言える、その自信が自分の支えになって、気持ちのありようが変わってきた気がします。

—俳優のお仕事だけでもお忙しいのに、習い事まで…。大変じゃないですか？

私にとって「何かを学ぶこと」は、決して特別なことではなくて、ごく自然なことなんですよ。それこそ20代の頃から「今は英語」「今は日本舞踊」「今は茶道」「中国語」と、その時その時に学びたいことに取り組んできたんです。

—お仕事と子育てに習い事と、毎日とてもお忙しいと思うんですけど、そんな田中さんにとってのリフレッシュ方法を教えてください！

私なりのリフレッシュ方法は、運動したり、マッサージに行ったり、本を読んだり、いろいろあるんですけど、一番のリフレッシュ方法はやっぱり旅ですね！



©2025 Yukikaze Partners.

### 絶賛公開中『雪風 YUKIKAZE』

生きて帰り、生きて還す。戦場の海から命を救い続けた、駆逐艦「雪風」の史実に基づく物語。

真珠湾奇襲攻撃による日米開戦以降、ミッドウェイ。ガダルカナル、ソロモン、マリアナと、すべての苛烈な戦いを生き抜き、どの戦場でも海に投げ出された多くの仲間たちを救い、必ず共に運ってきた一隻の駆逐艦があった。その名を「雪風」。いつしか海軍ではこの艦を“幸運艦”と呼ぶようになる。それは沈着冷静な艦長・寺澤(竹野内豊)の卓越した総艦技術と、下士官・兵を束ね、彼らから信頼される先任伍長・早瀬(玉木宏)の迅速な判断によるものだった。時にぶつかりながらも、互いに信頼し合っていく二人。そして「雪風」は、ついに日米海軍が雌雄を決するレイテ沖海戦へと向かうことになる…。

配給: ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント/バンダイナムコフィルムワークス  
 出演: 竹野内豊 玉木宏 奥平大兼 富真あみ 田中麗奈 中井貴一/脚本: 長谷川康夫 撮影監督: 柴山高秀 VFX監督: オダイッセイ  
 音楽: 岩代太郎 監督: 山田敏久 主題歌: 「手紙」 Uru(ソニー・ミュージックアソシエイテッドレコーズ)



読者  
プレゼント

**抽選で**

**田中麗奈さんサイン入り色紙…1名様**

**映画『雪風 YUKIKAZE』オリジナル手拭い…3名様**



ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用申し込みフォームから！

<https://jyh.jp/hm>

※応募〆切: 2025年12月末日

※当選者には応募時にご登録いただいたメールアドレス宛にご連絡いたします。  
 ©jyh.jpからのメールが受信できるように設定をお願いいたします。